

黄金薔薇十字団への序奏

石川 實

Introduction to the Secret Society "Gold- und Rosenkreuzer"

Minoru ISHIKAWA

I. 黄金薔薇十字団についての研究情況

18世紀研究で従来アカデミー正統が研究対象の圏外においてきた「秘密結社」にも、デュルメンの『イルミナーティの秘密結社』（1975. 参考文献の原文表題は末尾の文献表に示す。）以後は、かなり多くの研究が現れるようになった。おかげでフリーメイソンやイルミナーティについてはかなりまとまった知識を得ることができる。ただし、口火を切ったデュルメンをはじめアカデミー正統の研究者は、ほとんどが革新系で、啓蒙主義の合理主義的面のみに目を注ぎ、同時代に大きな力を持っていたエゾテリックな流れには目を塞ぐか、さもなくば単純明快に反動とたたづける傾向が強いように思われる。

このようなアカデミー正統の革新的合理主義的姿勢は黄金薔薇十字団 (Gold-und Rosenkreuzer) の研究にははなはだ不利だった。何しろ名うてのオカルト的集団なのだから。それにもかかわらず黄金薔薇十字団を黙殺することができなかったのは、主としてその政治世界での反動的活動のためだったとってよかろう。すなわち黄金薔薇十字団は、短い期間であったとはいえ、18世紀末のドイツで現実に政治を動かすことに成功しているのだ。一つは啓蒙専制君主の鑑のように思われていたフリードリヒ大王の後継者フリドリヒ・ヴィルヘルム二世に反動政策を取るよう牛耳ったことであり、いま一つはバイエルン公カール・テオドールをしてイルミナーティ弾圧に向かわせたことだ。だから1970年代から80年代にかけての秘密結社研究では、黄金薔薇十字団については「啓蒙主義の敵対者」というレッテルを貼り、この結社に起因する反動政策を叩けば仕事の大きな部分はすんだとってよかろう。革

平成17年2月28日 原稿受理
元大阪産業大学 教養部

新的な人物が一時この団体に関係しているなら、できるだけ無視するか、一時の迷いにすぎぬとかたづけるといったところだろう。

このような事情なので、黄金薔薇十字団の思想内容にまで分け入り、先入観に囚われずに参入者の内面を描き出すといったことは疎かにされてきたように思われる。革新的研究者にとってはエゾテリックな思想など詳細に検討するには値しなかったからだろう。しかしドイツでもアカデミーの外部においては、エゾテリックな秘密結社について1972年にすでにフリックの『光に触れた人たち。18世紀末までのグノーシス的・神知学的、錬金術的・薔薇十字的秘密結社——近代精神史論考』（1973）が出ている。フランスではそれより早くフォレストイエの大著『18, 19世紀における聖堂騎士団的、オカルト的フリーメイソン』（1970）が現れ、その独訳が1987年から1992年にかけて四巻本で出版されている。これらの書物によってフリーメイソンのエゾテリックな部分は十分明らかにされたといつてよかろう。すなわち非合理的な流れは黄金薔薇十字団にだけ現れたのではなく、啓蒙主義の担い手であるはずのフリーメイソンのなかにも深く浸透しており、すくなくとも秘密結社の領域では啓蒙主義とエゾテリズムは不可分であることが次第に明らかになってきたはずだ。筆者は「18世紀聖堂騎士団——厳守派フリーメイソン盛衰記」（『文学および社会における「近代」 産研叢書 13 2000）で従来はオカルト的集団とかたづけられていたフリーメイソンの一派「厳守派」の紹介を行ったが、これはフォレストイエやフリックに負う所が多かった。この論文では、エゾテリックな思想に深くかかわってゆく人たちもまた真剣にこの時代を生きた人であることを述べ、非合理的なるが故に無視すべきではないことを示そうと試みた。

18世紀におけるエゾテリズム思想の存在が次第に無視できなくなっていった一因としては、フランセス・イエイツのヘルメスの伝統の再発見に刺激されて、ドイツでもこの世紀のヘルメス主義の動向が注目されるようになったことを挙げるができるだろう。その最大の成果はツィーママンの『若きゲーテの世界像。ドイツ18世紀のヘルメスの伝統の研究』（Bd.1.1969, Bd.2. 1979）であろう。この方向は当然「薔薇十字」に突き当たるから、秘密結社研究にもこのつながりを取り上げるものが出てくる。この路線で興味ある研究はフィッシャーの『啓蒙主義とその敵対者。学問と政治における秘密結社の役割』（1982）であろう。この研究は啓蒙主義を一つの政治的プログラムとして捉えているのだが、それに先立ってまず薔薇十字運動を取り上げ、これを18世紀の啓蒙主義と結びつけようとしている。しかしながらこの試みは、啓蒙主義の源をエゾテリックな運動に見出そうとするものではなく、むしろ逆に薔薇十字運動を正統派の考える18世紀啓蒙主義の流れの中に組み込もうとしているようである。この書物では黄金薔薇十字団は薔薇十字団の「非嫡出の継承者」と位置付けられている。

フィッシャーのこのような革新的姿勢が端的に現れてくるのは、オーストリアのヨゼフ二世の啓蒙主義の代表的人物であるボルン (Ignaz Edler von Born 1742-91) と彼の主宰するロッジ「真の協調館」(Zur wahren Eintracht) についての記述である。フィッシャーは、このロッジがいかに明確な革新的な姿勢を有していたかをひたすら強調する。著者は、このロッジが最高の知性の集団であり、そのなかには後にカント哲学者として高名をはせたラインホルト (Karl Leonhard Reinhold 1758-1823) も加わっていたことも認めている。さらに機関誌「フリーメイソン・ジャーナル」(Journal für Freymaurer) にも言及しており、これをフランス革命以前においてはもっともラディカルな雑誌と評価している。しかし、この雑誌はフリーメイソンに必要な諸問題を論ずることを目的としたもので、その代表的テーマが古代密儀であるということについては固く口をを閉ざしているのである。もっともラディカルな啓蒙主義と評価した雑誌に古代密儀などという露骨にエゾテリックなテーマが入りこんでいることを認めると、正統的な啓蒙主義像の整合性をいちじるしく損なうことは明らかだ。啓蒙主義とエゾテリズムを結びつけることはタブーだったのだろうか。そのような疑惑を強める例をもう一つ見てみたい。

ボルンについて詳細に論じたラインアルターの「イグナーツ・フォン・ボルン——啓蒙主義者にしてフリーメイソンにしてイルミナーティ」(1989) は「フリーメイソン・ジャーナル」のみならず発表論文の元となったロッジにおける口頭発表のことにも触れているのだが、具体的な内容については何一つ述べていないのである。この機関誌にはボルン自身「エジプトの密儀について」(Ueber die Mysterien der Aegypter. 1784) という長大な論文を載せているのだが、ボルンの著作についてきわめて詳細な調査を行っているこの研究に密儀の論文の名だけは出てこないのはどうしたことだろうか。密儀研究の論文といえば、ラインホルトもこの雑誌に二号にわたって論文を出し、後に『ユダヤの密儀あるいは最古の宗教的フリーメイソン』(Die Hebräischen Mysterien oder die älteste religiöse Freymaurerey. 1788) と題する書物にしているのだ。これはシラーの『モーセの使命』(Die Sendung Moses. 1797) の参考書となっているにもかかわらず、この書物の存在は最近まで学界正統では隠蔽されてきた。タブーは強力だったとしか思えない。

いまでは啓蒙主義と密儀の結びつきは覆い隠しがたくなっているが、これにはヤン・アスマンの『エジプト人モーセ』(1997) の力がきわめて大きく働いていると思う。この書は啓蒙主義とエゾテリズムの不可分な関係を認識させ、研究情況に大きな変化をもたらした。その変化ははやくもこの書の出版の年に、アスマン自身も参加した、啓蒙主義とエゾテリズムの関係を討議するシンポジウムとなって現れた。この発表をもとにして1999年に論文集『啓蒙主義とエゾテリズム』が出版されると、啓蒙主義とエゾテリズムとを不可分なものとして

見る視点は定着したように思われる。新しい世紀を迎えると啓蒙主義とエゾテリズムという結びつけはもはやタブーではなくなっており、アカデミー正統の学者のなかにもエゾテリズム研究に精出す人が現れたようである。

研究状況の変化により、黄金薔薇十字団もオカルト反動団体と切り捨てるだけではすまなくなり、この結社を支持した人たちの著書も読み、その思想をまともに論じなくてはならなくなってくる。先に触れた論文集『啓蒙主義とエゾテリズム』にもそのような新しい状況を反映した黄金薔薇十字団論が掲載されており、その他にも精霊召喚術を論じた論文でもこの結社が取り上げられている。しかしながらこれらの研究からは、まだ黄金薔薇十字団の明確な輪郭が浮かんでこないのである。

黄金薔薇十字団の輪郭を知るには、メラーの「黄金薔薇十字兄弟団。反啓蒙主義的秘密結社の構造と目的の設定と影響」(1979)が今なお最適のようである。これはデュルメンのイルミナーティ研究に刺激されて生れたシンポジウムに基づく論文集『秘密結社』に入っているもので、はっきり革新路線を取っているものである。そこで本稿は、この結社の輪郭を描く第二章では、黄金薔薇十字団成立の環境を論ずる第一節でメラーの見解をエゾテリズム研究の成果から徹底的に批判した。それにつづく結社の歴史に関する第二節はメラーの説を骨組みとし、それにいくらかの補足を加えた。そして結社のシステムを扱う第三節では、メラーの説をそのまま紹介した。政治活動にかかわる第三章では、この活動における二人の主役をドイツではすっかり定着しているように思える悪玉像から解放することを試みた。この章ではメラーによる概観も参考にしているが、二人の主役の人物像、行動については、革新系でドイツ生まれではあるが英米で育ちドイツ学界の束縛から自由なエップシュタインの『ドイツにおける保守主義の起源』(1973)の記述を柱としながら、エゾテリズムにかかわる事柄についてはフォレスティエとフリックの研究を活用した。またこの章では、アカデミー正統の研究ではペテン師と掃き捨てられてしまう人物たちにもエゾテリズムにかかわるものとして光を当てるようにつとめた。最後の章では最近のエゾテリズム研究から黄金薔薇十字団に参加した代表的知識人であるフォルスターに照明を当て、そこに垣間見えてくるこの時代のエゾテリズム世界の深層を指摘して、今後の黄金薔薇十字団研究の一つの方向を示唆した。

II. 黄金薔薇十字団の輪郭

1. 成立の環境

メラーは、黄金薔薇十字団が形成された環境を1770年代以降の啓蒙主義の危機に見る。こ

の危機から発生した非合理主義を体現し、またこの非合理主義が蔓延する媒体となったのが黄金薔薇十字団であると位置付けるのである。啓蒙主義の危機とは具体的にいうと、一つは絶対主義体制の限界内での啓蒙主義的改革が壁に突き当たり、啓蒙主義的政策を進めてきた陣営の内部に動揺が起こり始めたことである。これは思想史上の変化を政治経済史上の変化の反映と見る革新系の学者に典型的な見解だ。しかし実際は「非合理主義」は70年代の行き詰まりで突然に出現したものではない。エゾテリスム復活は17世紀末、つまり初期啓蒙主義時代から始まっていた。メラーも黄金薔薇十字団の思想的基盤に薔薇十字思想、彼の言葉を使えば「新プラトン主義に基づく多様な神秘主義の伝統」があることを認めているが、この流れの復活にたいしてあくまで否定的であり、これを啓蒙主義にたいする反動と考えている。そのことは「18世紀後半にいたるまで、啓蒙主義がきれいにかたづけてしまうことができず、この時代に再び活発化した超常現象の肯定や迷信の復活」といった腹藏なき発言からはっきり読み取ることができる。メラーは反「非合理主義」の姿勢を明確に打ち出しているのである。これにたいしてツィーマーマンは「非合理主義」にたいしてまったく別の見方を取る。彼は『若きゲーテの世界像』第一巻の序説で、ヘルメスの伝統の復活は啓蒙主義にたいする反動ではなく、逆に啓蒙主義の成果であることを論証した。

啓蒙主義は人々をドグマから、原理主義から解放する。その結果として排他的な純一主義は力を失い、さまざまな思想の混在が認められるようになる。ヘルメス主義の故郷であるアレクサンドリア文化の特色は淆交にある。淆交思想は「折衷主義」と呼ばれる。この呼称は否定的色彩を帯びているのが普通だが、実はドグマ的一元論からの解放を意味しているのである。華やかなルネサンス思想は「折衷主義」だったが、宗教紛争のなかで原理主義化していった教会の純化、一元化の嵐の前にルネサンスの花は散っていった。啓蒙主義は再び「折衷主義」の花咲く季節をもたらしたのだ。ツィーマーマンは「折衷主義の登場は啓蒙主義の始まりを表示する」と言い、「折衷主義」を肯定的な意味にとるとともに啓蒙主義との一体化を確認している。実際17世紀末にはすでにおびただしい数のヘルメス文献が出版されるようになる。そしてヘルメス主義の復活を敏感に嗅ぎ付けた聖職者のなかにはすでに「プラトンの・ヘルメスのキリスト教」の脅威を警告する者も出てくるのである。つまり啓蒙主義とヘルメス主義復活は初めから一体となって進行しており、政治的経済的危機の産物といったものではなかったのである。

メラーは、非合理主義的思想の発生の一理由として、教会そのものが啓蒙主義化し、理神論の支配による神秘性の喪失が深刻な不満を呼び起こしたことを挙げている。この点についても「理神論」なるものの実態が多様であり、神秘性の喪失をもたらすとは限らないことを指摘したい。シラーは『モーセの使命』のなかで古代エジプトの密儀宗教を「こ

の純粋な理神論」と呼んでいる。つまり「理神論」はエゾテリズムをも包み込んでしまうことのできるような概念なのだ。

またメラーはフリーメイソンと黄金薔薇十字団の関係について、本来啓蒙主義と密接に結びついた結社であるフリーメイソンが、黄金薔薇十字団と結んだため没落したという説を取っているが、これも革新系の秘密結社論の通説にとらわれた意見である。革新系の学者は、デュルメン以来、フリーメイソンがエゾテリックなものになってゆくのは、フリーメイソンに潜入した黄金薔薇十字団員によるという説を取っているようだ。たしかに黄金薔薇十字団もイルミナーティもすでに存在しているロッジに潜入し、そのメンバーを取りこんでゆくという作戦は取っていた。しかしすでに述べたようにエゾテリックなフリーメイソン、例えば厳守派はフリーメイソン自身の発展の結果としてエゾテリックな性格を持つにいたったのであって、外部からの侵入者の乗っ取りによって生れたたわけではない。エゾテリックなフリーメイソンは、厳守派だけではない。シュタルクの「聖堂騎士団の聖職者」、ハウゼヴィッツの「十字架の修道士」等、アカデミー正統の研究はほとんど全く触れることはないが、いくつものエゾテリックなフリーメイソンがそれぞれ独自の教説とシステムをもって競い合っていたのである。これらの結社はこの時代のエゾテリズムの昂揚から生れたもので、黄金薔薇十字団の乗っ取りの結果ではない。

以上見てきたように、黄金薔薇十字団を啓蒙主義時代における孤立した特異現象のように見ることは、時代の実情に即さぬ偏った見解というべきだろう。黄金薔薇十字団はむしろこの時代のエゾテリックな性格を典型的に表している結社として考察されるべきではなかろうか。しかしながら黄金薔薇十字団については、フリーメイソンやイルミナーティにくらべて情報がきわめて少ないことは否定できない。たとえばベルリンのフリーメイソンのロッジは1779年には黄金薔薇十字団に完全に占拠されるにいたっていた。もしロッジに当時の文書が保管されていれば、黄金薔薇十字団最盛期の貴重な情報が得られたことであろう。しかし事実関係文書はきれいに抹殺されていたのである。ベルリンのみならずフリーメイソンのロッジにとって黄金薔薇十字団の占拠は闇に塗りこめるべき不祥事だったのである。元黄金薔薇十字団員は黙して語らぬか、否定的発言しかしない。こういったことも情報不足の理由かもしれない。とにかくフリーメイソンやイルミナーティとは異なり、この結社の創立者も成立年代さえ特定できないのだ。いつのまにか現れ、そして忽然として歴史の表から姿を消してしまう。そんな次第でその歴史は不明な点に満ちているのだが、次に黄金薔薇十字団の年代記を記してみたい。

2. 年代記

黄金薔薇十字団と17世紀の薔薇十字団との間には直接的結びつきはないことはまず確実のようである。「黄金薔薇十字団」という名称が初めて出現するのはシンケルス・レナートゥス (Sincerus Renatus), 本名ザムエル・リヒター (Samuel Richter 生年没年不詳) という人の著書の表題である。リヒターは、ヤーコブ・ベーメの思想に強く惹かれ、新しいベーメ思想の基礎の上に神知学、神秘主義思想、医学と錬金術とを結びつけようと努力していたという人物である。書物の表題は『黄金薔薇十字結社の友愛団の真の完全なる賢者の石の製造』(Die wahrhafte und vollkommene Bereitung des Philosophischen Steins der Bruderschaft aus dem Orden des Gülden-und Rosenkreuzes. 1710) である。この書はヘルメスの伝統の復活を告げるものとしては重要な意味を有するが、このときに現実に結社が存在していたかどうかは疑わしい。その存在を示すもっとも古い文書は1761年にプラハのグループのメンバーによって書かれたもので、これには規約、儀式に関する記述、メンバーの名簿が含まれている。この文書の一部は、1749年にライプチヒでヘルマン・フィクトゥルト (Hermann Fictuld) という名で発表された文書を丸ごと書き写したものである。この著者の名はヨーハン・ハインリヒ・シュミット (Johann Heinrich Schmidt) なる人物の仮名ではないかといわれている。シュミットはもしかすると結社創設に大きな役を演じているかもしれない。だが黄金薔薇十字団の歴史の第一段階にあたる1767年頃までの時代には不明な点が多い。そもそもこの第一段階では黄金薔薇十字団はエゾテリズムの世界で注目される存在ではなかったのである。この結社が公的に認識されるのは、プラハのサークルの閉鎖を命ずる勅令がはじめてである。以下この勅令発布の年から、年表形式で黄金薔薇十字団の出現と発展と消滅の概略を描いてみたい。

1764 プラハのグループにたいして閉鎖の勅令が発せられる。

1766 再度の閉鎖勅令が発せられる。この勅令で注目すべきことは「いわゆるフリーメイソンおよび薔薇十字友愛団」という言葉が見られることだ。この頃にいたって黄金薔薇十字団が公的にその存在を確認されたことがわかる。

この頃にはすでに黄金薔薇十字団のフリーメイソンのロッジへの潜入は相当に進んでいたようだ。このような潜入を容易にしたのは、ドイツ語圏のフリーメイソンの世界で厳守派のような高級位階制 (Hochgradssystem) を取るエゾテリックな勢力が優位を占めはじめていたという状況である。メラも聖堂騎士団継承伝説に触れ、これが「フリーメイソンの危機」を促進したと考えている。実はこの頃厳守派自身も危機

- に直面していたのであり、フリーメイソンのロッジへの侵入の好機到来といえよう。
- 1767 結社の改革が行われる。若い世代が支配権を握り、新しい理念を立て、結社の主要なプランが作成される。この改革以後黄金薔薇十字団は急速に拡大し、その影響力を強めてゆく。この頃ベルリンのフリーメイソンのロッジは厳守派が支配していたが、黄金薔薇十字団の侵入が始まっている。
- 1777 新たな改革が行われ、第二の主要計画が発表される。この計画では、フリーメイソンの本来の三位階——見習、徒弟、親方——を「高級の知識のための温床」と位置付けて、フリーメイソンのメンバーとなることを黄金薔薇十字団員となる前提条件としている。その意味するところは黄金薔薇十字団によるフリーメイソンの支配以外の何ものでもなく、「乗っ取り」を結社の計画の一つの柱として定立したことになる。そしてまた実際彼らは乗っ取り作戦を着々と実行し、フリーメイソンのロッジの中身を変えていったのである。
- 1779 ベルリンのロッジは厳守派を脱退する。完全に黄金薔薇十字団によって制覇されたのである。以後はベルリンのグループはこの結社の中心的存在となり、その活動により北ドイツ地域の黄金薔薇十字団は急速な成長を遂げる。
- 1781 プロイセンの皇太子（後のフリードリヒ・ヴィルヘルム二世）黄金薔薇十字団に入会。
- 1782 ヴィルヘルムスバートのフリーメイソン総会。厳守派の聖堂騎士団を継承するという教義が否認され、フリーメイソンのエゾテリックな傾向が致命的打撃を蒙ったため、黄金薔薇十字団のフリーメイソン乗っ取り計画は頓挫する。
- 1784 バイエルン公を兼ねるプファルツ選帝侯カール・テオドール（Karl Theodor 1742-99）が結社禁止令を發布。イルミナーティの弾圧が始まる。弾圧は翌年本格化し、90年代にまでおよぶ。首謀者は元イエズス会士の黄金薔薇十字団員で選帝侯の反動的な取り巻きの領袖であるイグナーツ・フランク（Ignaz Frank ?-1795）といわれている。
- 1786 フリードリヒ・ヴィルヘルム二世即位。彼は側近の黄金薔薇十字団員、ヴェルナーとビショフスヴェルダーの意のままになり、反啓蒙主義政策を進める。
- 1787 黄金薔薇十字団は活動の一時停止を命ずる文書を出す。これ以後は、結社として姿を現すことはなかった。活動は、元メンバーが一個人として行なうもののみとなる。黄金薔薇十字団は闇に消えてしまったのである。

3. システム

数多くのエゾテリックなフリーメイソンが覇を競っていた18世紀後半には、それぞれの派

は、独自性を打ち出すために他とは異なる新しいシステムを案出することに腐心していた。重要なのは儀式 (Ritual) である。入社 of イニシエーションの儀式、高位の位階に上る際のイニシエーションの儀式を考案しなくてはならない。そして組織の骨格をなすのが位階制であろう。本来の三つの位階の上にどのような高位の位階を積み上げていくかが問題となる。

i. 儀式

先に述べたように、黄金薔薇十字団は入会の第一条件としてフリーメイソンとなることを挙げているが、そのほかに結社に受け入れられるためには複雑なイニシエーションの儀式を経なくてはならなかった。メラーはその詳細な内容については述べていないが、この儀式では参入希望者は、フリーメイソンの数と図形のシンボルを薔薇十字風に変形したのを知り、また四つのエレメント、すなわち地水風火の教理を基礎知識の一つとして学ぶ。さらに集会の方式と場所、それに団員間の礼儀作法と位階制における礼儀作法を綿密に教え込まれる。

入会の儀式の重要な部分として宣誓がある。この宣誓で次の七つの義務が誓われる。1) 敬神の念の涵養。2) 隣人愛。3) 秘密の絶対厳守。これは秘密結社の決定的構成要素であるが、これと密接な関係を有する「首領の隠密性」(die Unkennbarkeit der Oberen) も「結社の基本原則」をなすものである。錬金術の仕事とか、結社の教説についての知識は、自分の属するグループの長にしか話すことは許されない。4) 結社に対する絶対的忠誠。5) 首領に対する絶対服従。6) 団員は自分に関係する事柄を首領に何一つ隠しだてはしない。7) 団員は自分が神と結社との所有物であることをしっかりと自覚する。

この宣誓の3) から7) までは、団員が一つの支配組織に組み込まれていることを明確に示している。階層的組織の頂点に首領が君臨する。首領は隠密であり、無誤謬であり、団員は首領に絶対服従し、その地位の正当性に疑いを懐いてはならない。

首領は、団員一人一人の心の本質を知りつくしており、心を改善し高めるのに必要なプロセスを熟知している。なぜなら彼らは目に見えぬ理性的存在の世界を見抜き、一つの精霊が有する諸々の力の育成のすべての段階を解釈することができるのである。このような首領に従うまいと思うのは恥ずかしいことだ。首領は命令するものであり、団員は従うものだ。首領に隠し立てはできない。事が露見したとき、首領はすでにそのことを知っているのだ。団員は他の団員の義務違反を詳細かつ余すことなく首領に報告せざるをえないのである。この結社のような首領を頂点に戴く絶対服従体制にはどうしても相互スパイ密告制度が必要になってくるのだ。メラーがここで黄金薔薇十字団について述べていることはすぐに、イルミネーティの相互スパイ制度を連想させる。秘密結社の最左翼と最右翼が同じ制度を持っている

というのはまことに興味あることである。それはさておき黄金薔薇十字団では首領は団員にとって一切秘密、団員は首領にたいして一切の秘密が存在せず、団員は神のごとき首領の手中にある意志のない道具にすぎないことになる。

ii. 位階制

1777年に出された主要計画は、魔術的な数と図形、合言葉、入会金、集会場所、各位階の内容について詳細に述べている。団員総数が5856名というのは、にわかに信じがたい。イルミナーティが最盛時でも700人を超えるものでなかったことを考えると、6000人に近いメンバーを擁するというのは幻想的で、メラーの言うように数魔術によって造られたものと考えられる。メラーの解説によると、5856を構成する5, 8, 5, 6を加えると24となり、2と4を加えると6で、これは神の天地創造の6日を示し、そのあとにくる神秘的安息を予告しているというのである。各位階のメンバーの数もまた数魔術によるものであろう。

この結社は九つの位階を持っている。以下最高位の第9位階から順に、名称、メンバー数、内容を列記するが、メラーの言うとおりでここでもフィクションと現実の混在の感を否めない。

9. 7人の賢者 (Magi)。神の諸力と秘密を除けば、自然の中で彼らに隠されているものは何一つない。彼らはその力で、モーセ、アロン、ソロモン、ヒラムのようにすべてのものを支配する。
8. 77人のマスター (Magistri)。自然に関する三つの主要な学に通じ、その上 das große Universal (賢者の石を作ることのできる万能の薬 Universalarznei ではなくろうか。筆者) を有する。そのうちすくなくとも27人は賢者の石を所有している。
7. 777人の義務を免除された達人 (Adepti exemti)。自然、カバラ、自然魔術についての重要な書物を学んではいるが、まだ別の仕事を命ぜられている。
6. 788人の上級者 (Majores)。彼らは賢者の石の四つの断片の一個もしくは数個をすでに作っている。
5. 799人の下級者 (Minores)。その大部分は「地上の哲学の太陽」(賢者の石のことか。筆者) を完全に知っており、奇跡の治療を行なうこともできる。
4. 822人の哲人 (Philosophi)。その数人は金属の自然の力を知っており、理論と実践を一体化している。
3. 833人の実践者 Practici。彼らは、まだ「カオス状態にある金属のエキス」(das chaotische Electrum minerale) を作ることができるが、まだその本当の用途は教えられていない。しかし彼らは皆、実践の第一段階の利用はできる。

2. 844人の理論学習者(Theoretici)。彼らは学院の本を読み、会の理論的な部分を学び、ヘルメス学に必要な基礎を身につけなくてはならない。
1. 909人の新参者(Juniores)。彼らは、結社の規則、儀式、教義問答、錬金術の記号と
いったこの会の初歩的部分を学習することに意を用いなくてはならない。

後にこの九つの位階の上にさらに「ソロモン」の位階が付け加えられた。

この位階制を現代の我々が一瞥するとき、それが錬金術の秘密の知に階梯を追って到達するための、言ってみれば、一種のカリキュラムのように見える。だがこれはまあなんと幻想的なカリキュラムであろうか。錬金術の世界に没入していない人間にとっては、これは恐ろしく手の込んだナンセンスにすぎないだろう。しかしこの位階制は、黄金薔薇十字団が二度目の改革に際して示した主要計画に示されたものであって、製作者は結社の命運をかけて、力の限りを尽くして考え出したに違いない。黄金薔薇十字団は、決して無学軽信の徒の集団ではない。最高の知性の持ち主も参加し、錬金術の理論と実践に真剣に取り組んでいたのだ。18世紀という時代の空気を理解するには、このような奇妙な現象を切り捨てたり隠蔽したりせずに素直に受け入れることが必要だ。アカデミー正統は、それでは啓蒙主義時代像の整合性が失われるのではないかと反論するかもしれない。混乱をきたそうとも、矛盾が生れようとも、賢者の石を真剣に追い求めるのもあの時代の知識人の一つの姿なのだ。それが18世紀という時代なのだ。とにかくメラーの位階についての記述は、現在の秘密結社研究でともすれば不問に付されがちな事実について貴重な情報を与えてくれているのであり、他のエゾテリックな秘密結社を理解する上で大いに助けとなるのである。

iii. 組織の編成

主要計画のなかには組織の編成に関するものもある。この結社は幾つかの管区から成っている。結社の組織の最小単位はサークル(Zirkel)である。その最大メンバー数は9人であるが、この数も、この結社では神聖な数とされている3の二乗ということによる。サークルには長(Zirkeldirektor)を置き、筆頭(Senior)、法務担当者(Justitarius)、書紀(Actuarius)、会計(Cassier)、新人指導者(Introduktor)という役職を設ける。つまりサークルの3分の2は役職に就いているというわけだ。各管区は複数のサークルを有している。

各管区のサークル長たちの上に主要管理部(Hauptdirektion)があり、そのまた上に、三頭政治構成の上級管理部(Oberdirektion)が置かれる。そしてこの上に隠密首領がいて結社の権力中枢を形成するのである。勿論この編成モデルもどこまで実現したかは疑問である。

メンバーの職業としては、上級貴族、高級官僚、上層市民、神学者、医者、自然研究者が主たる者で、上層階級に狙いをつけていたことがわかる。入団金の高さがすでに中層、下層階級を締め出していたのである。実はこのようなメンバー以外に忘れてはならぬ重要な分子がある。それは、メンバーの勧誘に大きな力をふるい、黄金薔薇十字団に不可思議な魅力を与えてきた、「ペテン師」(Scharlatan)たちである。アカデミー正統は歯牙にも掛けないが、彼らを単なる金目当ての詐欺師とたたづけるのはおおいに問題である。18世紀にあつては、ペテン師とエゾテリストという二分法を絶対的なものとするには同意できない。後で彼らの一、二の人物像に触れ、その意味も考えたいと思う。

Ⅲ. 政治的活動

すでに述べたように、アカデミー正統の革新系が黄金薔薇十字団を黙殺するわけにゆかなかった最大の理由は、おそらく黄金薔薇十字団員が短い時期ではあつたが、反啓蒙主義的反動的政策を画策し実現することができたということだろう。

先に年表で見たように、黄金薔薇十字団はバイエルンおよびプファルツとプロイセンにおいて反啓蒙主義政策を実現することに成功した。そのうち前者においては黄金薔薇十字団はあくまで舞台裏に身を潜めており、その活動については推測の域を出ない部分もあると撥ね付けることもできよう。これにたいしてプロイセンの場合は国王自らが入会しており、側近の二人の黄金薔薇十字団員に牛耳られ、反動政策を推進したのだから、これは取り上げざるをえないだろう。

舞台がドイツの啓蒙主義の中心地であつたベルリンだというのも皮肉であるが、中心だからこそ、反啓蒙主義陣営はこの都の攻略に熱意を燃やしたともいえるかもしれない。ベルリンのフリーメイソンのロッジは厳守派の支配する所となつていたが、次第に黄金薔薇十字団が潜入を進め、1779年には完全に支配権を握る。そしてベルリンのグループはこの結社の中心的位置を占めることとなる。やがてフリードリヒ大王の甥までも入会させることに成功するのだが、この人が王亡き後プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世 (Friedrich Wilhelm II. 1744-97 在位1786-97) となり、王の顧問であるヴェルナーとビショフスヴェルダーという二人の黄金薔薇十字団員の意のままになるのである。ただしここで一言言っておきたいのは、この王を手もなくペテンに引かかる愚帝と簡単にかたづけるのは考えものだということである。彼の偉大なる前任者である啓蒙的専制君主のもとでは「実に無味乾燥で貧弱で粗野だった国に、文化と才能の開花が始まり、それは五十年間つづいた」とハフナーは『プロイセンの歴史』(2000)で評価している。考えてみると偉大なる建築家シンケル

が腕を振るったのはこの時代だし、名優イフラントが絶頂期を迎えるのはこの時代の終わり頃であり、文学サロンが開花し始める時期でもある。しかしながらフリードリヒ・ヴィルヘルムは政治家としては大いに問題があった。かれの性格の弱さを反映して、政治の運営は常にぐらついていた。「性格の弱い人間が政権に着くとよくあることだが、頑固に自己主張するかと思えば他人の意志の言いなりになった。顧問の言うことには頼っているなどというようなまやさしいものではない依存ぶりだった」とエップシュタインは書いている。このような王であったから側近を二人の強力な黄金薔薇十字団員が固めていたとなると、その結果は期して待つべしということになるだろう。

1. ビショフスヴェルダー

ヨーハン・ルードルフ・フォン・ビショフスヴェルダー (Johann Rudolf Bischoffswerder 1741-1803) は貴族の出で、父は将校でザクセンの有名な元帥の副官を務めたこともあった。彼がヴェルナーほど憎まれない理由の一つは、とにかく貴族出で「成上がり者」ではないことだという。ビショフスヴェルダーは若い頃からエゾテリックな知識を熱烈に追い求めていたが、一方盲目的といってよいほど信仰にも厚かった。1764年に厳守派に入会するが、秘密の知識に対する渴望は癒される事はなかった。1774年、ビショフスヴェルダーは当時仕えていたクーアラント公カールの命により、シュレプファーなるものについての情報を得るためライプチヒに赴くが、この男に魅惑されされ、熱烈な信奉者となる。

ヨーハン・ゲオルク・シュレプファー (Johann Georg Schrepfer 1739-74) はライプチヒのカフェーの主人だったが、この町の厳守派に入会を希望して断られると、自らロッジを設け、これこそは真のロッジだと主張して厳守派のロッジと衝突、攻撃をつづけた。彼はマジックの達人で、幻灯を巧みに用いて霊を呼び出し、野外で雷鳴を起こすなどの業をやったので信奉者は少なくなかった。しかし次第に高まってゆく詐欺師という攻撃に追い詰められ、1774年の10月のある夜、ビショフスヴェルダーなど弟子たちを連れて散歩中、一行を離れ自殺してしまう。彼の死後ビショフスヴェルダーは、後に使うことになる幻灯などを取得したといわれている。シュレプファーは、黄金薔薇十字団員を自称しており、これが後にビショフスヴェルダーがこの結社に入会する一因となったと思われる。

1778年、ビショフスヴェルダーはバイエルン継承戦争に従軍、この際に後にフリードリヒ・ヴィルヘルム二世となる皇太子と近づきになる。1779年に黄金薔薇十字団に入り、この年重病を患った皇太子を看護し、黄金薔薇十字団の霊薬を調合して皇太子の病が治癒したので、大いに信任を高めることになる。

2. ヴェルナー

ヨーハン・クリストフ・ヴェルナー (Johann Christoph Wöllner 1732-1800) はきわめて貧しいルター派の牧師の家に生れた。最初は聖職を志しハレ大学で神学を学んだが断念し、上流社会で重きをなすある將軍未亡人の領地の管理を引き受ける。その間暇を見ては農業問題の書物や論文を発表しつづけ、やがてこの分野の権威となる。彼が好んで論文を発表した雑誌が、ベルリン啓蒙主義の中心的人物であるニコライ (Friedrich Nicolai 1733-1811) の主宰する『ドイツ百科叢書』(Allgemeine deutsche Bibliothek. 1765-1805) であったことは、大いに注目すべきことであろう。彼は十五年にわたって経済の分野でこの雑誌に協力しただけでなく、何年間もニコライと親密な関係にすらあったのである。つまり初期のヴェルナーはベルリン啓蒙主義の担い手の一人だったということだ。この頃のヴェルナーにはエゾテリックなものに向かう兆候はまったく見られない。

ヴェルナーはベルリンで1766年にフリーメイソンとなったが、68年には厳守派に入会し、その熱心さと持ち前の雄弁の才によって75年にはベルリン管区長にまでなっている。しかし深い秘密の知識を知ること、超自然的な力を身につけることもできず、大いに失望する。しかしながら、このロッジで有力な貴族やフリードリヒ大王の弟ハインリヒの寵を得ることとなる。1770年、ヴェルナーはハインリヒの力で財務顧問官としてベルリンに招聘される。ビショフスヴェルダーとの出会いは、ヴィースバーデンでのフリーメイソンの総会の時である。ここで二人は兄弟の契りを結ぶが、後にヴェルナーはビショフスヴェルダーの上司となる。ヴェルナーが黄金薔薇十字団に入会したのは1779年のことである。位階は第8の位階「マスター」にまで達したが、第9の位階「賢者」のメンバーが究極の秘密を明かすことを拒んでいるとこぼしている。

この二人の黄金薔薇十字団員は、出自は異にしているが、ともに政治的権力獲得後も、私利を追うことなく、権勢の亡者となることもなく、ひたすら信仰の復活のために戦ったのである。

3. 政権掌握

ヴェルナーは、ビショフスヴェルダーと密接に連携して黄金薔薇十字団の勢力を拡大していった。ビショフスヴェルダーはプロイセンの高級官僚を「ポツダム・サークル」に誘いこむことに力を尽くしたが、一方ヴェルナーは、当時有名だった化学者クラブポートなどもメンバーとなっている「ベルリン・サークル」を活発なプロパガンダの総司令部に仕立ててい

った。このような活動のおかげで黄金薔薇十字団の北ドイツ管区は26のサークルを有し、200人以上のメンバーを擁するまでに成長し、ヴェルナー自身も管区長となり26サークルの主要管理部という高みにまで昇った。しかしながら黄金薔薇十字団が政治的権力を握るための最大の計画は、皇太子自身をこの秘密結社に引き入れることだった。彼らが考え出した作戦は、言葉による説得ではなく、皇太子の前に霊を呼び出し、激しいショックを与えることによって呪縛してしまおうというものだった。場所としては、様々な仕掛を施したヴェルナーのベルリンの屋敷と、ヴェルナーたちの仲間となっていた皇太子の愛人リヒテナウ伯爵夫人の館が使われた。

従来は、この招霊会ではビショフスヴェルダーが主役を演じたように思われていたようだ。たしかに彼がシュレプファーから手法を学び、受け継いだ幻灯などのからくりも利用したかもしれない。しかしフォレストイエは、もっとも有能なスタッフを勤めたのは腹話術師で変装の名人であるシュタイネルト (Steinert) と称する人物だったということを明らかにした。シュタイネルトはマジックの達人で、ウィーンにロッジを設け多くの信奉者を有していた。マジックを使うには「聖堂」と名づけた、鏡仕掛を施した秘密の部屋を用いた。彼は、星の精霊に命令することができる」と称していたが、ある時精霊に捧げるからと言って、「聖堂」に集めた信者たちに身につけていた装身具を洗いざらい祭壇の上に置かせ布を掛けた後、精霊召喚の術を行なった。轟音とともに祭壇を電光が貫き、濃い煙が部屋を満たす。煙が晴れると祭壇は空になっていたという次第である。また彼は一瞬にして消え、忽然として別の場所に出現して見せるという離れ業もやってのけたという。しかし度重なる不注意な行動のため遂に警察が動き出すにいたったので、ウィーンから逐電、ベルリンに逃れて黄金薔薇十字団に使われることになる。このマジシャンの助けを得て黄金薔薇十字団員は、王子の前に、ライブニッツやシーザー、それに夭折した王子の息子の霊を出現させた。感動した王子は遂に黄金薔薇十字団に入会することを望むにいたる。

1781年、皇太子の入会の儀式はシャルロッテンブルク宮でいとも華麗に執り行なわれた。三人の霊が召喚され、皇太子に歓迎の言葉を述べ、彼が名目上はこの結社の創設者の後継者となることを祝した。第一に現れた霊は、すでに以前に出会ったことのあるライブニッツだった。二番目には古代ローマの賢帝マルクス・アウレリウスが姿を見せた。そして最後にプロイセン王国の初代の王である大選帝侯フリードリヒ一世が登場して、未来の国王に富と長寿を約束した。皇太子は霊に質問することを許されていたのだが、感動のあまり一言の質問も発することができなかった。かくして黄金薔薇十字団の作戦は大成功を収め、皇太子は完全にこの結社の虜となってしまったのである。

新王の即位は1786年だが、それ以前、大王の治世の最後の数年間、ヴェルナーは皇太子に

様々な時事問題について個人教授を行なった。彼は皇太子に黄金薔薇十字思想を吹き込むことに努めていただけではない。硬直しもろくなっているプロイセンの改造にとっての急務をよく心得えた啓蒙主義的保守改革者として、商業の自由化、不道德な企業家の限度を知らぬ利潤追求欲にたいする労働者の保護、大土地の農民への分割等多くの提言をした。ヴェルナーは、留めようもなく変化してゆくヨーロッパのなかでプロイセンが生き残ってゆくために、このような世俗的領域における改革が決定的に重要であることをよく知っていた。それにもかかわらず、これよりはるかに重要と考えていたのは、大王と啓蒙主義的大臣たちがこの国に植え付けた不信仰の桎梏からプロイセンを解放するという黄金薔薇十字団のプログラムだった。1785年、ヴェルナーは皇太子のために書いた『宗教論』(Abhandlung über die Religion)を奉呈しているが、この本には新王の治下で実行されるべき宗教政策のプログラムのすべてが述べられているのである。

即位すると新王は直ちにヴェルナーに寵愛を示し、貴族の身分に引きあげる。いよいよプロイセンの反啓蒙主義の時代がはじまるわけだ。新王は、次々と反動政策を押し進めてゆくが、この政策の多くにヴェルナーは決定的に関与していた。ヴェルナーはビショフスヴェルダールへの書簡で、望みはただ一つプロイセンの「国全体を再びイエスの信仰に連れ戻すことだ」と述べている。それゆえに彼の最大の目標は、啓蒙主義者、合理主義者の強力な支援者であり、自らも徹底した合理主義者で不信の徒である宗務省 (geistliches Departement) の長ツェドリッツ (Karl Abraham von Zedlitz 1731-1793) を更迭し、これにとって代わることであった。ツェドリッツは宗教関係のみならず教育体制をも支配し、容赦のない合理主義者を教育行政の重要な位地に据えるといったことをやってのけた。ヴェルナーは「啓蒙主義にたいする戦いにおける総司令部を私にゆだねることを可とされるならば、戦闘準備は万全である」と言っている。1788年、ヴェルナーは遂に目的を達成し、ツェドリッツに代わって宗務省の長に任命される。総司令部を押さえ、いよいよ反啓蒙主義戦は火蓋を切ったのである。彼の任命 (1788年7月9日) のわずか六日後にはもう「宗教勅令」(Religionsedikt) が発布される。この勅令はルター派教会の支配領域にいる牧師及び教師にたいして、ルターの手紙から逸脱することを一切禁ずるといった厳しいものだ。しかし公正を欠かぬためには、プロイセンにおいて信仰の自由を法的にしっかりと定めたのは、この勅令がはじめてだということも黙殺してはならない。この勅令に対してはルター派教会から激しいプロテストが起こったが、この年の十二月にはさらに検閲勅令 (Zensuredikt) が発布される。勅令によって理神論者の牧師や学者は痛撃を受けた。神学的問題の啓蒙主義的な議論は大幅に抑圧され、教会は政府の管理を受け、学校教育までコントロールされるようになった。

勅令の遵守を監視することは一つの委員会に委ねられたが、そのメンバーのうち二人は黄

金薔薇十字団員であった。この委員会の力で、二大啓蒙主義雑誌である『ベルリン月報』(Berlinische Monatsschrift)と『ドイツ百科叢書』は一時プロイセンを退去せざるをえなくなった。カントさえ処分を受けているのである。「このような自由なディスカッションの抑圧にこそヴェルナーの政策の本当に反動的な核心があったのだ」とメラーは書いている。

しかしながら黄金薔薇十字団の反啓蒙主義政策があらゆる分野において貫徹されたというわけではない。ヴェルナーの政策の中心はどこまでも宗教にあった。このことは黄金薔薇十字団が政治的に活動し始めた後も、この結社の真の願いは宗教的なものでありつづけたいうことを示している。ヴェルナーは、内政の他の分野ではむしろ啓蒙主義的といってよいような改革に取りかかるのだが、ここでははっきりとした成功を収めることはできなかった。

IV. 今後の研究課題——テウルギー

黄金薔薇十字団というようなエゾテリックな秘密結社がアカデミックな研究で取り上げてもらえたのは、それが現実に反啓蒙主義政策を推進する働きをしたことが主たる理由であろうから、反動政策の実現を見届けてしまえばこれ以上この結社と付き合ういわれはなからう。だから黄金薔薇十字団員の思想などは、視野の外に置かれても不思議はない。実際また黄金薔薇十字団に関係した学者、知識人が正面から取り上げられるようになったのはどうやら「啓蒙主義とエゾテリズム」という枠組みが確立され、エゾテリックな思想が啓蒙主義と不可分なものとして論ぜられるようになってからのことらしい。もちろんツイーマンがリヒター等を取り上げたような先駆的研究はあるが、このような研究はしばらくは孤島の感があった。

黄金薔薇十字団系の知識人を正面から取り上げはじめたものに論文集『啓蒙主義とエゾテリズム』に収められたプリースマーの「錬金術と理性。後期啓蒙主義時代の薔薇十字的・ヘルメスの運動」がある。プリースマーはこう書いている。「だが、黄金薔薇十字団を招霊師や狂信者や頭の混乱した人にすぎないと考えるなら、これは誤りだろう。なぜなら、この結社には頭脳のきわめて優れた人たちも入会していたからだ。」そしてプリースマーは、そのような優れた知識人のなかでもっとも有名なフォルスター (Johann Ggeorg Adam Forster 1754-1794) について掘り下げた考察をすすめる。フォルスターと医師である友人ゼマーリング (Samuel Thomas Sömmerring 1755-1830) とはともにロンドンでフリーメイソンとなるが、カッセルで厳守派に入り、やがて黄金薔薇十字団の「カスラー・サークル」に入会する。その時期は1779年からさほど経っていない頃と思われる。「カスラー・サークル」は錬金術の実験を極秘にし、全く悟られていなかったらしいが、相当熱狂的なものだったらしいことは、フォルスターからゼマーリングに宛てた手紙から推察できる。実験の目的は賢者

の石の製造だった。

後にドイツ・ジャコバン派の主要メンバーの一人となったフォルスターがなぜ黄金薔薇十字団に入り、熱狂的に錬金術の仕事に取り組んだのだろうか。1784年6月5日にゼマーリングに宛てた手紙で、フォルスターは入会の理由を次のように書いている。「真実を求めて止まぬ心と、ある種の真実についての確信を得たいという燃えるような渴望、それにその真実が可能でありまた本当であると思いたがる傾向が加わったもの——これだけが、私に四年間もC [カッセル] で実験をする気にさせたものだ。」フォルスターもゼマーリングも金属の変成を信じたいと思っていた。その際彼らの心を引っ張っていったのは、まず自然についての秘密の深い知識が得られるかもしれないという希望だったろう。プリスマーは、このほかに17世紀の薔薇十字団に見られるユートピアを志向する理想主義的な姿勢が働いていただろうと考える。それにもう一つ金銭上の理由が加わる。家族を養うに必要だっただけでなく、錬金術の実験は多額の金を飲み込んでいったのである。

1783年になると次第に冷静な気持ちが生れてくる。その年の12月20日付けのカスラー・サークルの元メンバーに宛てたとと思われる手紙では、本当の秘密の学が存在を否定しきれないものの、世に行なわれる大抵のものはまやかしであるという見解に達している。そしてそれから間もなく黄金薔薇十字団と手を切るのである。面白いのは黄金薔薇十字団からそっぽ向いてからもフォルスターは物質変成を信じていたことである。さらにフォルスターは、黄金薔薇十字団の首領たちが現実に物質変成法を有している可能性を否定しようとはしなかった。ただし、彼らが実際にこの方法を公開するだろうとは、決して思っていないからではあるが。

この手紙にはいま一つ注目すべき記述が見られる。「以前は、同時に精霊の世界の存在と、この世界とのコミュニケーションの可能性とを信ずるのでなければ、金属変成を受け入れることはできないと思っていた。いまは私にとって自然がすべてだ。」つまりフォルスターのかかわっていた黄金薔薇十字団の錬金術は、精霊の世界との交流という魔術思想を背後に持っていたということが、この記述から推察できるのである。これは大変興味深いことである。なぜなら黄金薔薇十字団の思想をテウルギー (Theurgie) すなわち「精霊召喚術」との連関から見るという視点が生れてくるからだ。

私たちはエゾテリズムというと錬金術、占星術といったものしか思い浮かべない。しかし18世紀後半に復活したエゾテリズムの流れのなかではテウルギーは大きな位置を占めているのだ。論文集『啓蒙主義とエゾテリズム』ではザヴィツキの「幽霊と彼らのアンシャン・レジーム。後期啓蒙主義の〈暗黒面〉としての幽霊信仰」が招霊術を論じてゆくうちに精霊召喚術に説き及んでいる。周知のように18世紀後半のヨーロッパでは招霊の会が流行したが、

この時代の招霊術の根底をなしているのは新プラトン主義的精霊召喚術すなわちテウルギーなのである。ザヴィッキは、当時テウルギーで権威ある書はイアンブリコス『エジプトの密儀について』であったと言い、1496年にフィチーノが翻訳して以来ヨーロッパ知識人の入手できるものになっていたと述べている。後期新プラトン主義の哲学者イアンブリコス(Iamblichos 325頃没)はプラトニズムのエジプト化を徹底的に進め、ついに哲学の占めていた位置にテウルギーを据えてしまったという人物で、彼の思想はルネサンス以来綿々と続く精霊召喚術の流れのなかで常にきわめて重要な意味を持ちつづけてきたのである。

面白いのは、ザヴィッキの論文『エジプトの密儀について』に触れた文のすぐ後につづく「1760年代になるとエジプト風のマジシャンとして登場するペテン師たちも、少なくともこの本の表題ぐらいは知っていた」という記述である。大変控えめな表現だが、ペテン師たちもまたテウルギーの流れに触れていたらしいということが推察される。18世紀の「ペテン師」つまりマジシャンたちは彼らなりに、この時代のエジプト復活の波に乗り、エジプト的「プラトン主義」を聞き齧りぐらいはしていたのだろう。ここで思い出されるのは、プロイセンの皇太子を誑かす召霊の会で活躍したシュタイネルトが、星の精霊召喚の術を心得ていると称していたことである。これは、マジシャンたちのなかにもテウルギーについていささか承知している者がいたという証拠であるだけでなく、黄金薔薇十字団とテウルギーとの連関を示唆する貴重な例でもある。さらに一步を進めて言うならば、そもそもこの時代に「ペテン師」とエゾテリストの間に厳密に線を引くことが可能なのだろうか。大いに疑問である。シュレプファーやシュタイネルトたちが招霊の術を熱演している時、はたして彼らは冷静に合理主義的にひたすら人を誑かすことを考えていたのだろうか。彼らもまた密儀に参加している心境になっていたということは、ありえないのだろうか。このマジシャンたちも、ペテン師、詐欺師と罵って、あっさり犯罪史の手に引き渡してしまわずに、黄金薔薇十字団の儀式の不可欠の構成要素として捉えなおしてみてもどうか。

黄金薔薇十字団は錬金術に携わる結社と見えるだろうが、その背後に隠れているテウルギーをもう少し掘り下げてみる必要があると思う。黄金薔薇十字団の招霊の会も「政治的陰謀のための詐欺」という固定した枠から外してみてもどうか。結社の視点から見れば招霊は明らかにこの結社の行なう密儀だ。プロイセン皇太子のために催された華麗なる招霊の会は入会の儀式という密儀であることを忘れてはなるまい。そこで使われたマジックも密儀を成立させる重要な要素であることは論を待たない。招霊はテウルギーの一つの形にすぎない。入会の儀式として執り行なわれた招霊は新プラトン主義の精霊召喚思想の一つの具象化とも言えるのである。そもそもテウルギーを結社の儀式に取り入れたのは、黄金薔薇十字団がはじめてではない。啓蒙主義の本家フランスで1760年頃、マルチネス・ド・パスカリという人が

「エリユー・コーエン」(選ばれたる祭司)という秘密結社を創立した。これは、フリーメイソンを装っているが実はテウルギーの秘密結社だった。神秘思想家サン・マルタンもこの結社に入っており、その思想の根幹はここで形成されている。

テウルギーの復活、そしてその典拠としてのイアンブリコス書の復権は、18世紀後半に起こったエジプト復興の潮流と深くかかわっているものと思われる。このような関連からもこの等閑に付されてきた問題を追究し、ルネサンス以来のテウルギーの伝統との関連も考察することは、18世紀エゾテリズム研究に一つの新しい展望を開くことになるだろう。その結果として黄金薔薇十字団も孤立した特異な反動的オカルト集団といったイメージから解放され、18世紀エゾテリズムの一つの鮮やかな顕現として考察されることになるのではなかろうか。黄金薔薇十字団は何故優れた知性の持ち主を引き付けることができたのか、という未解決の問題もそこで始めて解明されるかもしれないのである。

参考した主な文献

- Jan Assmann: Moses der Ägypter. Entzifferung einer Gedächtnisspur. München-Wien 1997.
- Richard van Dülmen: Die Geheimbund der Illuminaten. Darstellung, Analyse, Dokumentation. Stuttgart-Bad Cannstatt 1975. (2. Aufl. 1977)
- Klaus Epstein: Die Ursprünge des Konservatismus in Deutschland. Der Ausgangspunkt: Die Herausforderung durch die französische Revolution, 1770-1806. Frankfurt/M.-Berlin 1973.
- Michael W. Fischer: Die Aufklärung und ihr Gegenteil. Die Rolle der Geheimbünde in Wissenschaft und Politik. Berlin 1982.
- René Le Forestier: Die templerische und okkultistische Freimaurerei im 18. und 19. Jahrhundert. Bd.3. Leimen 1990.
- Karl R. H. Frick: Die Erleuchteten. Gnostisch-theosophische und alchemistisch-rosenkreuzerische Geheimgesellschaften bis zum Ende des 18. Jahrhunderts — ein Beitrag zur Geistesgeschichte der Neuzeit. Graz 1973.
- セバスチアン・ハフナー『プロイセンの歴史』2000。(原著 Sebastian Haffner: Preußen ohne Legende. 1978)
- Horst Möller: Die Gold- und Rosenkreuzer. Struktur, Zielsetzung und Wirkung einer anti-aufklärerischen Geheimgesellschaft. In: Geheime Gesellschaften. Hrsg. v. Peter Christian Ludz. Heidelberg 1979.
- Claus Priesmer: Alchemie und Vernunft. Die rosenkreuzerische und hermetische Bewegung in der Zeit der Spätaufklärung. In: Aufklärung und Esoterik. Hrsg. V. Monika Neugebauer-Wölk unter Mitarbeit von Holger Zaunstöck. Hamburg 1999.
- Helmut Reinalter: Ignaz von Born - Aufklärer, Freimaurer und Illuminat. In: Aufklärung und Geheimgesellschaften. Hrsg. v. Helmut Reinalter. München 1989.
- Thomas Stäcker: Die Stellung der Theurgie in der Lehre Jamblichs. Frankfurt/M.-Berlin-Bern-New York-Paris - Wien 1994.

Diethard Sawicki: Die Gespenster und ihr Ancien régime: Geisterglaube als <Nachtseite> der Spätaufklärung. In: Aufklärung und Esoterik.

Rolf Christian Zimmerman: Das Weltbild des jungen Goethe. Studien zur hermetischen Tradition des deutschen 18. Jahrhunderts. Bd.1. München 1969.